

『要綱』「貨幣にかんする章」

重 田 澄 男

- I. 『経済学批判要綱』の構成
 1. 執筆と構成
 2. 『要綱』冒頭の奇妙な見出し
- II. 「貨幣にかんする章」
 1. 「貨幣にかんする章」設定の意義
 2. 「交換価値の章」の構想
 3. 「貨幣にかんする章」の内容
 4. 「交換価値にもとづく生産」概念の定置

I. 『経済学批判要綱』の構成

1. 執筆と構成

『要綱』の執筆

1850年代中頃の一時期、経済学の研究から遠ざかっていたマルクスは、国際貨幣市場恐慌の切迫に刺激されて、1856年10月頃よりふたたび経済学の研究を開始し、1857年7月より1858年5月末にかけて『1857-58年の経済学草稿』とよばれている膨大な草稿を『7冊のノート』に書きあげている。

この『1857-58年の経済学草稿』なる『7冊のノート』には、三つの草稿がふくまれている。それは、二つの短い未完成の草稿すなわち「バステリア

とケアリ」および「序説」と、そして、『経済学批判要綱』と後に名づけられた大きな著作の草稿とである。

マルクスは、1857年8月末、下向法・上向法なる経済学の方法や初めての経済学プランについての指摘をふくむ「序説」を書きあげたが、そこで示された経済学篇別構成プランは次のごときものであった。

「篇別区分は、明らかに、次のようになされるべきである。すなわち、(1) 一般的抽象的諸規定。それらはしたがって多かれ少なかれすべての社会諸形態に通じる……。 (2) ブルジョア (市^{ビュルガーリヒ}民) 社会の内的編制をなし、また基本的諸階級がその上に存立している諸範疇。資本、賃労働、土地所有。それら相互の関連。都市と農村。三大社会階級。これら三階級のあいだの交換。流通。信用制度 (私的)。 (3) ブルジョア (市^{ビュルガーリヒ}民) 社会の国家の形態での総括。自己自身にたいする関連での考察。『不生産的』諸階級。租税、国債。公信用。人口。殖民。 (4) 生産の国際的関係。国際的分業。国際的交換。輸出入。為替相場。 (5) 世界市場と恐慌」¹⁾

ここで注目されることは、この経済学篇別構成プランの冒頭の第1篇は「一般的抽象的諸規定。それらはしたがって多かれ少なかれすべての社会諸形態につうじる……」となっており、それにつづく第2篇は「……資本、賃労働、土地所有。……三大社会階級。」となっていて、そこには「貨幣にかんする篇」も「価値 (商品) にかんする篇」も存在していない、ということである。

このことは、『経済学批判要綱』に取り組む直前におけるマルクスの経済学体系プランの内的構想を示すものである。

「序説」執筆の1カ月ほどの後、マルクスは、1857年10月から『7冊のノート』のなかの『経済学批判要綱』と後に呼ばれる部分に取り組み、ダリモン『銀行の改革について』をはじめとして「貨幣にかんする章」を書きは

じめる。そして、11月に入るや、『ノートII』のなかで「資本にかんする章」に筆をすすめ、翌1858年の5月末に『ノートVII』において『要綱』を書きおえたようである。

内容的には『原・資本論』ともみなされ、量的にも50印刷全紙をこえ旧版の原書で850ページちかいの膨大な草稿を、わずか8カ月ほどで書きあげたことになる。ものすごいスピードである。

マルクスは、1857年12月8日付けのエンゲルス宛ての手紙のなかで、そのことについて、「僕は毎晩、夜を徹して、気が狂ったように、経済学研究の取りまとめにかかっている、大洪水〔恐慌のこと—重田〕の来る前に、せめて要綱だけでもはっきりさせておこうと思ってね²⁾と述べ、さらに10日後の12月18日付けの手紙でも、「僕はものすごく勉強している、たいてい、朝の4時までやる。勉強することが倍あるからだ。すなわち、1、経済学の要綱の仕上げ。……2、現在の恐慌。これについては——『トリビューン』に書く論説以外は——ノートをとるだけなのだが、これがしかし、相当時間を食うのだ³⁾と書いている。

そこでふれられているように、この時期のマルクスは『要綱』の執筆だけにかかりきっていたのではない。生活費を稼ぐ必要もあって寄稿していた『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』紙向けの論説として、「1844年の銀行法とイギリスの貨幣恐慌」など3篇、「ヨーロッパの金融恐慌」など3篇、「イギリスの貿易」「来るべきインド公債」「ボナパルトの暗殺未遂」など4篇、「時代の前兆」など9篇等の執筆をおこなっており、そのうえ、さらに、1858年1月前半にはヘーゲルの論理学を再読したり⁴⁾、産業循環の問題に関連して機械の摩損について研究しバビッジの『機械およびマニファクチュア経済論』を読んだりしており、しかも、それらは持病の肝臓の疾患に悩まされながらの仕事であった。

まったく驚異的なタフぶりである。当時のマルクスの年齢は30代の最後、まさに40歳になろうとするところであった。

『要綱』の構成

ここで、『経済学批判要綱』の構成と内容についての概括的一瞥のために、新MEGA版での見出しを示しておこう(表1)。

ところで、マルクス自身は『要綱』においてきわめてわずかしか見出しをつけておらず、表1に示された目次のなかのキッコカッコ(〔 〕)で括られているものは新MEGA編集部によって付けられたものである。

そこからも明らかなように、『経済学批判要綱』は、どうみても、「序説」で述べられている経済学の理論体系の方法とプランにしたがって、前もって十分に構想を練り、篇別・章別構成を明確にしたうえで、叙述されたものとは思えない。

『要綱』自体の執筆にとっての篇別構成は、むしろ『要綱』そのものの叙述の進行のなかで具体化され、修正され、再構成されていったようである。

そして、そのなかで、「序説」で示された経済学批判体系の章別構成プランそのものもまた、『要綱』の叙述の進行のなかで修正されていていっている。そのことは、『要綱』のなかのいくつかの個所や、あるいは、エンゲルスやラサール宛てのマルクスの手紙等のなかで、さまざまなかたちで提示されている経済学プランのバリエーションとその変遷において、示されているところである⁵⁾。

さらに、『経済学批判要綱』が十分に練りあげられた篇別構成にもとづいて書かれたものではないことは、形式的側面からみても、それぞれの篇・章・節の見出しの不備や極度の欠落、さらには、篇・章の付け方の乱れ等にもあらわれている。

たとえば、「貨幣にかんする章」のなかの「〔貨幣の通流〕」では、「貨幣の通流」という見出しは付けられておらず、さらに、「a」と「b」との項の見出しはアルファベットしか書かれていないのに、「c」の項だけ「c 富の物質的代表物としての貨幣(貨幣の蓄積。そのまえになお諸契約の一般的質料としての貨幣、その他)」という詳しい見出しが付けられている。

表1 『経済学批判要綱』目次

II) 貨幣にかんする章	[ノート I]
アルフレッド・タリモン『銀行の改革について』, バリ, 1856年	
[貨幣の成立と本質]	
[貨幣関係の担い手としての貴金属]	
a 他の金属との関係における金と銀	
b 種々の金属のあいだの価値関係の変動	
[貨幣の通流]	
a [諸価値の尺度としての貨幣]	
b [流通手段としての貨幣]	
c 富の物質的代表物としての貨幣。(貨幣の蓄積。そのまえになお諸契約の一般的質料としての貨幣, その他)	[ノート II]
III) 資本にかんする章	
[第1章 資本の生産過程]	
資本としての貨幣にかんする章	
[貨幣の資本への転化]	
1 流通と流通から生じる交換価値が資本の前提	
2 流通から生じる交換価値は自己を流通の前提とする, また流通のなかで自己を保持するとともに, 労働を介して自己を倍加させる	
[資本と労働のあいだの交換]	
[労働過程と価値増殖過程]	[ノート III]
[絶対的剰余価値と相対的剰余価値]	
[剰余価値と利潤]	
[第2章 資本の流通過程]	[ノート IV]
[資本の再生産と蓄積]	
[資本制的生産に先行する諸形態]	
[資本の循環]	[ノート V]
[剰余価値と利潤についての諸学説]	
[固定資本と流動資本]	[ノート VI]
[固定資本と社会の生産諸力の発展]	
[固定資本および流動資本の流通ならびに再生産]	[ノート VII]
第3章 果実をもたらすものとしての資本。利子。利潤。(生産費用, 等々)	
[貨幣にかんする章と資本にかんする章とへの補足]	
[価値の尺度としての貨幣]	
[流通手段としての貨幣, および, 自立した価値としての貨幣]	
[機械装置と利潤]	
[疎外]	
[雑]	
(1) 価値	
[金貨計量機]	

また、「資本にかんする章」においては、そのなかにさらに「章」が立てられており、しかも、第1章も第2章もないのに「第3章 果実をもたらすものとしての資本、利子、利潤（生産費等）」だけが置かれていたりしている。

そのようなきわめてずさんな見出しの付け方による篇別構成のもとで、叙述がすすめられているのである。

内容的にみても、叙述のなかでのさまざまな試行錯誤的な叙述のゆれや論点のふみだしといったところがかかなりある。マルクスは、『要綱』の執筆終了直後の1858年5月31日付けのエンゲルス宛ての手紙において、「いまいましいことには、原稿（これは印刷すれば分厚い一巻になるだろう）のなかにはいろいろなことがごちゃ混ぜになっており、ずっとあとの方に置くべき箇所がたくさんあるのだ⁶⁾と書いているほどである。

それらの点からみて、『要綱』は、かなり大雑把で概略的なものでしかない執筆構想のもとで、しかも、ものすごいスピードでの叙述がすすめられたものとみていいようである。

そのようなことから生じている見出しの不備を補うために、1939-41年に出版され1953年に再版された旧MEGA版の『要綱』では、マルクスが『要綱』執筆終了の後（1858年2月あるいは1861年夏）に作成した「私自身のノート『要綱』にかんする摘録」において要約的に整理された項目を利用して、かなりこまかく見出しがつけられていた⁷⁾。

そのようなやり方にたいして、新しく編集出版された新MEGA版は、「前に出た初版と異なって、〔新MEGAでの〕テキストは、あとになってからできた諸資料を使うかたちでの整理はなされていない。そうすることは歴史的原則と矛盾するだろうからである。ごくわずかの見出しが、編集者によって挿入されたが、それらは編集者注と角括弧によって明示されている⁸⁾として

している。しかし、それでもなお、新MEGA版においても、「私自身のノートにかんする摘録」での区分にしたがったり、『資本論』にひきつけた見出しが付け

られたりしているところがあるし、さらにいえば、新 MEGA 編集者によって挿入された見出しの内容や表現や場所が適切であるかどうかについて疑問のあるところもある。

たとえば、「資本にかんする章」の始まる個所については内田弘氏によって疑問が提示されているし、あるいは、『要綱』においてはまだマルクスは確定していなかった「資本制的生産 die kapitalistische Produktion」という用語を使った「資本制的生産に先行する諸形態」という見出しが付けられたりしている。したがって、新 MEGA 編集部によって挿入されている見出しについても、見出しの場所、内容、表現用語にいたるまで慎重な判断が必要である。

2. 『要綱』冒頭の奇妙な見出し

「II) 貨幣にかんする章」

『要綱』は、その冒頭に、「II) 貨幣にかんする章」という見出しが付けられ、そこに「アルフレッド・ダリモン『銀行の改革について』、パリ、1856年」と書かれていて、ブルードン主義者アルフレッド・ダリモンの『銀行の改革について』(Alfred Darimon, *De la Réforme des Banques, Avec une introduction par M. Emile de Girardin*. Paris 1856.) の抜粋と評注とともに、それにたいする批判的検討がおこなわれている。

ところで、どうして叙述の冒頭の最初の章の見出しに「II)」というナンバーが付けられているのだろうか。なんとも奇妙である。

この奇妙な事態は、『要綱』が、前もって十分な構想を練った篇別構成にもとづいて叙述されたものではなかったことによって、ひきおこされたものである。

そもそも冒頭に書かれた「II) 貨幣にかんする章」という見出しは、『要綱』執筆の最初に書かれたものではない。

マルクスの草稿についての執筆状況を記載している新MEGAは、「成立と来歴」のなかの「典拠文書についての記録」において、『要綱』の『ノート第1冊』の冒頭部分にかんして次のように指摘している。

「まず、マルクスは、彼の草稿のこの部分に、「アルフレッド・ダリモン『銀行の改革について』、パリ、1856年」という見出しをつけた。あとからマルクスはそのうえに、わりあい大きな文字で、それよりはなはだしく幅を広げて書かれた表題「II) 貨幣にかんする章」と書いた。そのさい「貨幣」の語は、特別に大きい、太い文字で書かれ、「II) はあとになってから書きそえられた。このページからマルクスの手跡で、インクで書かれた新しいページづけ(1-44)が始まっており、それはノートの終わりにまで及んでいる。」⁹⁾

このことは、新MEGAにおけるこのページ部分のフォト・コピーからもみることができるところである。

このように、冒頭に書き込まれている「II) 貨幣にかんする章」という見出しは、本文の叙述の途中で書き込まれたものであり、しかも、「貨幣にかんする章」という見出しの書き込みのさらに後になって、「II)」が付け加えられているのである。

『ノートI』における『要綱』の冒頭に「貨幣にかんする章」という見出しが付けられたのは、貨幣論の本文の執筆途中であって、それはおそくとも『ノートII』に移る時までであろう、とみられている。というのは、『ノートII』の第1ページの第1行目のうえに「貨幣にかんする章。(続き)」と書かれているから、その前までに『ノートI』の冒頭の「貨幣にかんする章」という見出しは書かれたのであろう、と推察されているのである。

ところで、それに「II)」というナンバーがつけられたのは、それよりさらに後であったとみられている。

「II）」というナンバーの書き入れの時期については、正確なところよく分からない。

その点について、新MEGA編集部は、MEGA II-1.1の「序文」において、次のように指摘している。

「マルクスは、ブルードン主義者アルフレッド・ダリモンの経済観、とりわけブルードン主義的な貨幣論の批判から草稿を始めている。……／のちになってマルクスは、草稿の最初の部分に「貨幣にかんする章」という表題をあたえたが、おそらくIIの番号¹⁰⁾が付記されたのは、半年たつてからのことのようなのである。同じ章にはすでに、「交換価値の篇」、「交換価値そのものについて論じる章」がその前に置かれねばならない旨の指示がみられる。」¹¹⁾

なお、「IIの番号が付記されたのは」『要綱』の執筆開始から「半年たつてから」ということであれば、1858年3月頃であって、マルクスはすでに最終ノートたる『ノートVII』に取り組んでいた時期であり、「交換価値の篇」や「交換価値そのものについて論じる章」についての指摘をおこなった時期ではなく、『要綱』の終了ちかい時期である可能性が大である。

しかも、「II）貨幣にかんする章」の前に位置するものとしての「(1) 価値」が書かれたのは、『要綱』の執筆の「最後」¹²⁾あるいは『要綱』執筆後すこしたつて「7冊のノート（第1部）への索引」の作成と同じかその後の時期¹³⁾とみられている。この「(1) 価値」は『ノートVII』の『要綱』本文の終りの部分に書かれている。

いずれにしても、「貨幣にかんする章」という『ノートI』の冒頭に付けられた「貨幣にかんする章」に「II）」というナンバーが書き加えられたのは『7冊のノート』における『要綱』の最終ノートたる『ノートVII』の執筆の時期であろう、とみられるようである。

かくして、『要綱』全体にとっての基本的構成である「貨幣にかんする章」と「資本にかんする章」との区別も、さらには、「(I) 価値—(II) 貨幣」—「(III) 資本」の区別とそれにもとづく構成も、『要綱』の執筆開始のはじめから明確なかたちで構想されて見出しを付けて取り組まれたものではないことは、明らかである。

ダリモン『銀行の改革について』による『要綱』の開始

『経済学批判要綱』の目次をみても分かるように、『要綱』の執筆は、まずブルードン主義者アルフレッド・ダリモンの『銀行の改革について』の抜粋と評注から始められている。

ダリモン『銀行の改革について』が『要綱』の冒頭において取りあげられたのは、いかなる理由によるものであるのか。そこにおけるダリモン『銀行の改革について』の検討は、『要綱』において展開されているマルクスの経済学批判体系の体系的上向のための始元範疇をなすものであることによるものなのだろうか。

ダリモン『銀行の改革について』が『要綱』の冒頭において取りあげられた理由とそのもつ意義については、先にみた新 MEGA の「典拠文書についての記録」やフォト・コピーなどによるマルクスの草稿執筆状況について考証の指摘がなかった旧『要綱』にもとづいたものとして、いくつかの見解がある。

たとえば、森田桐郎氏は、「ダリモンに対する批判から彼〔マルクス〕が貨幣論の自己了解的展開をはじめたのは、ほかでもない、そこに——ブルードン＝ダリモンの貨幣把握に——誤まれる近代市民社会認識の原点をみだしたからである」¹⁴⁾とされている。

また、シュラーダーやヴィゴツキーは、恐慌の原因を金・銀の特権的な役割に求めて「労働貨幣」の発行による恐慌の克服を構想するブルードン主義者ダリモンの批判的検討は、貨幣材料での価値表現と労働時間での価値表現

との関係を明らかにし、価値論—貨幣論への必然的連関の解明へと導くことになる、とみなしている¹⁵⁾。

しかし、新MEGAの「典拠文書についての記録」にみられるように、マルクスが『要綱』の『ノートI』を執筆しはじめたその最初には、「貨幣にかんする章」という見出しは付けられていなかったのである。

『ノートI』の執筆にあたって、マルクスは、まず、「アルフレッド・ダリモン『銀行の改革について』、パリ、1856年」という見出しを付け、それに つづけて、ダリモンの著作の第1ページから始まる抜粋（ページ付きで）とそれについてのコメントを書き込むという記入方法で、記述を始めているのである。

そのような執筆の最初の時点における記述内容、すなわち、まずダリモンの氏名・書名・著書の発行場所・発行年を見出しとして書きこむという記述の形式は、これまでマルクスがくりかえしおこなってきた『抜粋ノート』の記述形式に他ならぬものである。

ということは、マルクスが、「ダリモン『銀行の改革について』、パリ、1856年」と書いた最初の時点においては、マルクスは、1843—45年にパリでおこなった『経済学ノート』以来くりかえしてきた一連の『抜粋ノート』のひとつとしてダリモンの著書についての抜粋をおこなうつもりであったとみる方が妥当なように思われる。

そのような『抜粋ノート』として、マルクスは、ダリモンからの抜粋と評注をおこなって、ブルードン主義者ダリモンの貨幣論の批判、とりわけブルードン主義的な「労働貨幣」ないしは「時間票券」によるブルジョア社会の治療についてのブルードン主義的命題の批判的検討をおこなおうとしたのであろう。

ところが、ダリモンの著作についての抜粋と評注を書いているなかで、マルクスは、しだいにダリモンから離れて貨幣についての一般的吟味に向かうことになる。

すなわち、マルクスは、最初に、「1855年10月にフランス銀行が、同行の金銀保有高がしだいに減少するのを防ぐためにとった措置」についてのダリモンの指摘を抜粋するところから始めながら、5ページ目になると、「ここでわれわれは出発点とはもはや関係のない根本問題に到達している」¹⁶⁾として、貨幣にとっての一般的な問題への広がりについて指摘し、「問題は一般的にはこうであろう、すなわち、流通用具の——流通の組織の——変更によって、現在の生産諸関係とそれに照応する分配諸関係とを変革することができるのか?と。さらに次のことが問題となる、すなわち、流通のそのような変形は、現存の生産諸関係とそれに立脚した社会的諸関係に手をふれることなしに、これを企てることができるものであろうか?と」¹⁷⁾と、貨幣制度の改革による社会の生産関係の変革構想の問題点を指摘する。

そして、やがて、「時間票券を採用することだけによって、すべての恐慌、ブルジョア的〔市民的〕^{ビュルガーリヒ}生産 (bürgerliche Produktion) のすべての弊害がどのように除去されることになるのか」¹⁸⁾とプルードン主義的経済理論の問題点の焦点を示しながら、貨幣の価値の基礎としての労働時間量と商品価値との考察へと論点を移行しているのである。

こうして、『要綱』の『ノートI』においてダリモンの『銀行の改革について』の抜粋と評注をおこなうなかで、マルクスの叙述の内容は次第に貨幣論の一般理論へと移行していくのである。

このような貨幣の一般理論へ、いつ、どこから移行したのか、その区切りはかならずしも明確ではない。新MEGA編集部は『ノートI』の12ページの後半部分でダリモン『銀行の改革について』の検討の終了をとらえて、そこに「〔貨幣の成立と本質〕」という見出しを付けて貨幣論の論述の展開が始まったものとしている。だが、マルクスが『要綱』執筆後に作成した「7冊のノートへの索引」においては、新たな全体的再構成による一般的議論の開始は『ノートI』の11ページの終わりちかくの「価値」についての論議から始まるものとしているようである。

ともあれ、そこでの価値と貨幣価値との区別についての論究をへて、やがて、貨幣の本質と諸機能についての全面的な解明へとすすむのであるが、そのなかで、マルクスは、『ノート I』が終わるまでに、そこで論じている内容を自己の経済学体系の展開のなかの「貨幣」にかんする「章」とすることを確定し、「貨幣にかんする章」という見出しを『ノート I』の冒頭に書き込むにいたる。

いってみれば、ブルードン主義者ダリモンの『銀行の改革について』の抜粋と評注をおこなってブルードン的な「労働貨幣」あるいは「時間票券」についての貨幣論の批判的論議をおこなうなかで、マルクスは貨幣論の一般的議論に入り込むことになり、貨幣論を議論しているなかで「貨幣にかんする章」を立てる必要があると考えるようになって、『ノート I』の冒頭に「貨幣にかんする章」という見出しを付けることになったものと思われる。

そのように、「貨幣にかんする章」という章を立てることによって、『経済学批判要綱』とよばれるマルクスの経済理論の叙述は、あらたな体系的構成におけるものとして打ちたてられはじめた、とみてよいであろう。

そして、『ノート II』に入り、その冒頭に「貨幣にかんする章。(続き)」と書き込み、『ノート II』の3ページ目の終わりちかくの、「貨幣にかんする章」の論述が終わりに近づいたところで、マルクスは、先にみた「序説」の経済学篇別構成プランと違って、「諸交換価値、貨幣、諸価格が考察されるこの第1篇」という項目を組み入れた次のような『経済学批判要綱』第1プランを、書き込んでいるのである。

「諸交換価値、貨幣、諸価格が考察されるこの第1篇では、諸商品はつねに、現存するものとして現われる。形態規定は単純である。われわれは、諸商品が社会的生産の諸規定を表現していることを、知っているが、しかし社会的生産は、それ自体としては、前提である。しかも諸商品は、このような規定において措定されてはいない。それで実際のところ最初の交換

は、生産の全体をとらえることもなく、またそれを規定することもないところの余剰の交換として現われるにすぎない。それは、諸交換価値の世界の外部にある生産全体の、現存する過剰物なのである。そこでまた発展した社会においてもなお、この諸交換価値の世界は、直接的に現存している商品世界として、表面上に現われ出てくる。しかし諸交換価値の世界は、自己自身をつうじて、自己をのりこえて、生産諸関係として措定されている経済的諸関係を指ししめず。それゆえ、生産の内部的な編制 (Gliederung) が第2篇をなし、国家における総括が第3篇をなし、国際的關係が第4篇をなし、世界市場が終篇をなす。この世界市場の篇では、生産は総体性として措定されており、同時に生産の諸契機のいずれもが措定されている。しかしながら同時に、そこではすべての諸矛盾が過程に登場する。世界市場はこのばあいまたしても、同様に全体の前提をなし、全体の担い手をなしている。そのさい恐慌は、前提をのりこえることへの全般的指示であり、新しい歴史的姿態の受容への促迫である。』¹⁹⁾

ここにおいて、経済学批判体系の冒頭の「第1篇」は「諸交換価値、貨幣、諸価格が考察される」ものであるとされているのであるが、このプランの提示にあたって、初めて置かれることになった「第1篇 諸交換価値、貨幣、……」についての内容と意義づけの説明が、項目だけを示している他の諸篇に比して異常に詳しいものとなっており、このことは「諸交換価値、貨幣、諸価格が考察されるこの第1篇」が新たな構想における独自の自立した冒頭の篇となるということについてのマルクスの意気込みが示されている、と感じられるところである。

II. 「貨幣にかんする章」

1. 「貨幣にかんする章」設定の意義

ところで、マルクスが、「貨幣」の一般理論について叙述している途中において、『ノートI』の冒頭に「貨幣にかんする章」という見出しを付けて、『要綱』にとっての「貨幣にかんする章」を確定したということは、『要綱』の構成と内容にとってきわめて重要な意味をもつものである。

マルクスが『要綱』の執筆中に、現に書いている内容を「貨幣にかんする章」とするということを決めたということは、『要綱』執筆の直前に書かれた「序説」プランの時点では存在していなかった「貨幣」についての内容が、「序説」プランでマルクスが中心的本論と考えていた「ブルジョアビュルガージ(市民)社会の内的編制をなし、また基本的諸階級がそのうえに存立している諸範疇」たる「資本、賃労働、土地所有」についての考察と展開の前に、自立した「章」として必要であるということ、執筆の途中でマルクスが確定したということの意味する。

そして、それは、やがて『経済学批判要綱』における「貨幣にかんする章」と「資本にかんする章」との基本的な二章構成による展開へとすすんでいくことになるのである。

なお、この『要綱』第1プランにおける「諸交換価値、貨幣、諸価格が考察される第1篇」なるものは、「序説」プランのいう「一般的抽象的規定」に他ならぬものであるのか、あるいは、「序章」²⁰⁾なのか、それとも本論のなかの「第1篇」²¹⁾とみなされるべきものであるのか、その位置づけはかならずしも明らかではないとして、これまで諸説が立てられていたところである。

ともあれ、このように『要綱』のはじめの個所に「貨幣にかんする章」が設定され、そのあとで、近代社会における資本・賃労働・土地所有といった三大階級の経済的基礎の解明がおこなわれるという経済理論における体系的配置は、その後のマルクスの、近代社会の経済的諸関係にかんする理論的解明の形成史において、その冒頭部分については、『要綱』の「貨幣にかんする章」に始まり、ついで、もっぱら商品・貨幣関係のみを取り扱った『経済学批判』第1分冊へ、そして、『資本論』冒頭の「商品」「貨幣」の叙述へと繋がっていくところである。

ところで、マルクスが、ロンドンに亡命する前に、1848年革命のなかでドイツ人労働者協会で講演し、さらに『新ライン新聞』に連載した論稿は『賃労働と資本』であった。『賃労働と資本』は、近代社会における資本・賃労働の階級関係の本質的内容と歴史的使命をストレートに真正面から取りあげたものであった。

そうであるにもかかわらず、マルクスにとって初めての経済学体系を展開しようとした『経済学批判要綱』において、どうして《賃労働と資本》から始めないで、《貨幣》から始めることになったのか。「貨幣にかんする章」が自立的な章（篇）として確定されることになった契機は何であるのか。

その直接的契機は明らかではない。マルクスがダリモンの『銀行の改革について』の抜粋と評注からいつの間にか貨幣の一般理論について取り組んでいくなかで、そのような発想はひきおこされてきたものであろう。

だが、そこにおいて思索の材料となったものは、1850年代前半の時期の『ロンドン・ノート』における貨幣・信用論への取り組みとそれと関連した小論稿や抜粋の第二次加工などによる貨幣・信用論への吟味であったことは、まず間違いのないところであろう。

マルクスは、1855年時点において、エンゲルス宛ての手紙（1855年2月13日）のなかで、「書物を書き上げるのでないにしても、ともかく材料を自分のものにしていつでもそれに手を加えていくことができるようにしておくた

め²²⁾に彼の『経済学ノート』に目を通したと伝えている。

そのさい、1850年代前半につくりあげてきた『ロンドン・ノート』などへの取り組みが重要な意味をもったであろうことについては、『要綱』のなかのとくに「貨幣にかんする章」において、『ロンドン・ノート』やさらにそれから抜粋整理された「完成された貨幣体制」「貨幣制度、信用制度、恐慌」などがしばしば利用されていることにも示されている。

2. 「交換価値の章」の構想

ところで、マルクスは、「貨幣にかんする章」のなかで、「交換価値」については、「貨幣」の論議とは別に、「交換価値の篇 [Abschnitt]」で説明すべきであるという指摘をおこなっている。

55ページある「貨幣にかんする章」のなかの半分以上もすぎた37ページ目の「b [流通手段としての貨幣]」の項のなかで、次のような指摘がおこなわれている。

「諸価格は、その実現がどんなに貨幣流通の結果として現象しようとも、貨幣流通の前提なのである。諸商品の交換価値を騰落させることによって、諸商品の価格をそれらの平均価値以上または以下に騰落させる諸事情は、交換価値の篇で (in dem Abschnitt vom Tauschwerth) 展開されるべきであって、諸商品の貨幣での現実的実現の過程に先行する。」²³⁾

ここでいわれていることは、要するに、「価格」における「諸商品の貨幣での現実的実現の過程」については「貨幣についての篇」で取り扱うが、しかし、その過程に先行する「諸商品の交換価値を騰落させることによって、諸商品の価格をそれらの平均価値以上または以下に騰落させる諸事情」すなわち諸商品の交換価値そのものの騰落については「交換価値の篇で展開され

るべき」ものである、ということである。

さらにそのあとの42ページ目の「富の物質的代表物としての貨幣」の項においても、次のような指摘がおこなわれている。

「1ポンドの綿花の金にたいするこの本源的な関係——この関係によって1ポンドの綿花に含まれている金の量が規定される——は、両者に実現されている労働時間、つまり諸交換価値の現実的な共通の実体の量によって、措定されている。このことは、交換価値そのものについて論じる章 (dem Chapter das über den Tauschwerth als solchen handelt) からして、前提とされなければならないことである。」²⁴⁾

ここで述べていることは、交換される1ポンドの綿花と一定量の金との両者のそれぞれの交換価値の現実的な共通の実体の量は労働時間であるが、このように「交換価値の現実的な共通の実体の量」が「労働時間」であるということは、「交換価値そのものについて論じる章」において前提的に明らかにしておくべきことである、ということである。

すなわち、商品にとっての交換価値あるいはその基礎としての価値の大きさと労働時間との関係については、「貨幣」の章ではなくて、「価値」または「交換価値」についての章において前もって展開しておくべきである、としているのである。

とはいえ、そのようにマルクスが価値または交換価値についての範疇的区別と論述の展開の必要性に思いいたったにしても、それは、その時点において、「貨幣」とは別に「交換価値」を独自の「篇」または「章」として自立させ、「価値」—「貨幣」—「資本」の三篇構成を『要綱』の基本的構成とすべきであると構想したことを意味するものではなかった。

マルクスは、「貨幣にかんする章」の時点においては、「価値」と「貨幣」とは同じ篇あるいは章のなかの小区分として考えていたようである。そのこ

とは、『要綱』における経済学体系第1プランにおける「諸交換価値，貨幣，諸価格が考察される第1篇」という指摘に明らかに示されているところである。

それが、『要綱』の全体を書きおわる『ノートVII』の終了時になって、最終的に「(1) 価値」と書き込み、そして、「(1) 価値」について「この篇はあとから用いるためのもの」と述べてから書きはじめられ、しかもノート1ページ分も書き切らないところで中断したまま打ち切られてしまっているのである。

そのように、「交換価値」または「価値」にかんする章の自立的な「章」としての設定ということは、『要綱』の執筆終了時点あるいは終了後になってはじめて構想されたものようである。

そして、最終的には、「(1) 価値」の章を置いて、「(1) 価値」—「II) 貨幣」—「III) 資本」の構成が考えられるようになり、「貨幣にかんする章」に「II)」というナンバーが付けられるにいたった、ということであろう。

そのように、『要綱』の冒頭の「II) 貨幣にかんする章」という奇妙な見出しは、貨幣にかんする執筆の途中で「貨幣にかんする章」という見出しが付けられ、さらにそれよりも後になって「II)」というナンバーが付けられるという、2回にわたる後からの加筆によって形成されたものであって、それは、急ピッチで走りながら構想を練りなおしていた『要綱』のマルクスにとってシンボリックな見出しであるということが出来るものである。

ところで、マルクスは、そのような「交換価値」にかんする諸問題だけではなく、さらに、貨幣論そのものの内容についても、「特別に篇をもうけて、あとから補足すべきことは、以下の諸点である」²⁵⁾として、次のような諸項目を挙げている。

- (1) 鑄貨としての貨幣。
- (2) 歴史的に金銀の購入先。金銀の発見など。それらの生産の歴史。
- (3) 貴金属の価値の変動の諸原因、したがってまた金属貨幣の価値の

変動の諸原因。

(4) とりわけ、通貨の量の、諸価格の騰落にたいする関連。

(5) 通貨について——速度、必要量、通過の作用……。

(6) 貨幣の解体的作用。

これは、マルクスが、『要綱』の「貨幣にかんする章」においてなお十分あるいは取り残されたと考えた諸論点を示すものである。

それどころか、マルクスは、「資本にかんする章」の執筆が終わった後に、さらに、「貨幣にかんする章と資本にかんする章とへの補足」として、「価値の尺度としての貨幣」「流通手段としての貨幣、および、自立した価値としての貨幣」といった見出しと「雑」という見出しのもとに、貨幣論についての追加的な諸文献からの抜粋と論述をおこなっているのである。

このように、貨幣についての論述の途中で「貨幣にかんする章」の設定や、最後になっての「II」というナンバー付け、さらには、「貨幣にかんする章」の執筆の半ば以上経ってからの「交換価値にかんする章」あるいは「篇」を前に置く必要があるという指摘や、あるいは、貨幣にかんして「あとから補足すべきこと」の諸項目の列挙や抜粋の記述や論述をおこなっているといったことは、「貨幣にかんする章」の、ひいては『要綱』そのものが、前もって明確な完成した体系的なプランにもとづいて取り組まれたものではなくて、記述しながら構想し、構想しながら記述していくといった、まさに内容物が満ち溢れてマグマを噴きだしながら形をととのえているといった感じの、内容と構成についてはいささか混沌状態にある体系的形成への途上の産物であったことを示すものである。

マルクスは、『要綱』執筆終了の半年ほど後の1858年11月29日付けエンゲルス宛て手紙のなかで、『要綱』の「貨幣にかんする章」にもとづいて執筆された『経済学批判』からみると、『要綱』では「第1章、商品は、草案〔『要綱』〕では全然書かれてなかったものであり、また第2章、貨幣または単純な流通は、ごく簡単な輪郭だけしか書かれていなかったものだ²⁶⁾と指摘

しているのである。

3. 「貨幣にかんする章」の内容

「貨幣にかんする章」の内容

では、この「貨幣にかんする章」で取りあげられている貨幣論の基本的内容は、いかなるものであるのだろうか。

とりあえず、新MEGAの見出しにそくしてみるならば、そこでは次の三つの見出しのもとで叙述がおこなわれている。

1. 貨幣の成立と本質
2. 貨幣関係の担い手としての貴金属
3. 貨幣の通流 a) 価値尺度 b) 流通手段 c) 蓄蔵貨幣

マルクスは、まずはじめの〔貨幣の成立と本質〕において、貨幣の本質的内容とそれに関連する諸論点を問題にし、ついで、〔貨幣関係の担い手としての貴金属〕において、貨幣材料としての貴金属の性質や金・銀と他の金属との関係などを取りあげ、最後に、〔貨幣の通流〕において、価値尺度、流通手段、蓄蔵貨幣といった貨幣の諸機能と、それとの関連における交換価値の運動における諸事態について取りあげている。

ところで、この「貨幣にかんする章」における商品・貨幣関係の規定的性格と内容はいかなるものであるのか。

マルクスは、1850年代はじめの『ロンドン・ノート』の時期においては、小論稿「省察」にみられるように、「貨幣」における経済関係について、商人と商人とのあいだの取引における「資本の移転」とそして商人と消費者との取引における「資本と所得との交換」という把握や、あるいは、賃金・利潤・地代といった所得の階級的源泉の指摘といったかたちで、商品・貨幣関係には「諸階級が前提されている」ととらえている。だが、同時に、「貨幣の形態」は「階級性格をあいまいにし、それを糊塗する」ような「ブルジョア

（市^{ビュルガーリヒ}民）社会における平等の外観が生じる」ようになる、という把握をもおこなっている。

ところが、『要綱』の「貨幣にかんする章」では、商品・貨幣関係については、基本的には、商品交換や売買において労働時間の対象化による「交換価値」にもとづく等価交換がおこなわれるものにとらえて、そこでは自由・平等の市民的関係が貫徹しているという把握に純化している。

交換価値にもとづく等価物の交換関係

マルクスは、ダリモン²⁷の直接的検討から離れて「貨幣にかんする章」の本論部分に入るところで、商品の価値と価格について、「すべての商品（労働も含めて）の価値（実質的交換価値）は、その商品の生産費用によって、別の言葉で言えば、その商品の生産のために必要とされる労働時間によって規定されている。価格は、この商品の交換価値が貨幣で表現されたものである」²⁷と指摘している。

このように、マルクスは、『要綱』の「貨幣にかんする章」においては、「商品」の「（交換）価値」を「商品の生産のために必要とされる労働時間によって規定」されるものとして把握し、そのうえで、そのような「交換価値」を「貨幣」によって表現したものが商品の「価格」であるととらえている。

そのような把握のなかで、マルクスは、対象化された労働時間の分量によってその大きさが規定されているものとしての「交換価値」を、商品交換や貨幣による売買をとらえるにあたってのキー・カテゴリーとしているのである。

そのようなキー・カテゴリーとしての商品や貨幣の「交換価値」にとっての「労働時間の対象化」としての規定的関係を、マルクスはくりかえし強調している。

「商品(生産物あるいは生産用具)はいずれも、一定の労働時間の対象化に等しい。商品の価値、すなわち商品が他の諸商品と交換され、あるいはまた他の諸商品がその商品と交換される割合は、その商品に実現されている労働時間の分量に等しい。……商品が価値(交換価値)であるのは、交換(現実の交換であれ、表象された交換であれ)においてだけである。この商品の交換能力一般だけではなく、商品の特有な交換可能性が価値なのである。」²⁸⁾

商品の「交換価値」の大きさはその生産において必要とされた労働時間の対象化された分量に規定されるものであるというこのような把握の重要性の認識こそが、おそらく「貨幣」について論じる前に「交換価値」についての章を立てて論じておく必要がある、という判断へと繋がっていったところであらうと思われる。

そして、マルクスは、「貨幣」を「純粋な交換価値としての商品が貨幣である」²⁹⁾といったかたちでとらえながら、交換価値についての一般的等価物としての貨幣の成立を論じ、貨幣の諸機能や商人の出現や銀行業務についてふれていく。また、貨幣の諸性質(諸機能)についても、「貨幣の諸性質、(1) 商品交換の尺度としての、(2) 交換手段としての、(3) 諸商品の代表物としての(したがって契約の対象としての)、(4) 特殊な諸商品とならぶ一般的商品としての、——これらはすべて、諸商品それ自身から切りはなされた、対象化された交換価値という貨幣の規定から単純に出てくる」³⁰⁾とし、「対象化された交換価値という貨幣の規定」にもとづくものとしてとらえている。

自由と平等の体制の実現としての貨幣システム

そのように、『要綱』「貨幣にかんする章」におけるマルクスは、「交換価値」の交換としての商品・貨幣関係においては、それらの交換をおこなって

いる諸個人、諸主体は単純に交換者としての平等の連関をもつものであって、交換の主体としてはそれ以外の人格的な区別や社会的なあるいは階級的な差異は消えてしまっている、とみなしている。

そこにおいて「主体はどちらも交換者である。すなわち、そのどちらもが、相手が彼にたいしてもっているのと同じ社会的関連を相手にたいしてもっている。それゆえ交換の主体として、彼らの関連は平等の関連である。彼らのあいだになんらかの区別とか、ましてや対立をさがしだすことさえ不可能である」³¹⁾のであって、「貨幣体制は、事実上この自由と平等の体制の実現でしかありえない。……3シリングで商品を買う労働者は、売り手にたいしては、商品の同じ買い方をする国王と、同じ機能、同じ平等のなかにあるものとして、——つまり3シリングという形態で、現われる。両者のあいだの区別はいつさい消し去られている」³²⁾とし、商品の売り手と買い手との交換者の相互関係における平等性ととも、さらに、商品の買い手としては「労働者」であろうと「国王」であろうと売り手にとっては同じ機能、平等の買い手であって、そこには「区別はいつさい消し去られている」ととらえていくのである。

そして、そのような諸個人や諸主体の平等を措定する交換は、自由をももたらすものであるとする。つまり、「経済的な形態すなわち交換が、あらゆる面からみて諸主体の平等を措定するとすれば、交換をうながす内容、すなわち個人的でもあれば物象的でもある素材は、自由を措定する。したがって平等と自由が、交換価値にもとづく交換で重んじられるだけでなく、諸交換価値の交換が、あらゆる平等と自由の生産的で実在的な土台である」³³⁾ととらえるのである。

このような商品・貨幣関係における規定的性格は、マルクスにとっては、『経済学批判要綱』の時点において、カテゴリー的性格をもつものとして理論的に、明示的かつ自覚的に確定されたものであって、この時期以降におけるマルクスの理論的構築にとってきわめて重要な意義をもつものである。

すなわち、マルクスにおいては、このような商品・貨幣関係における諸個人、諸主体の「交換価値」を基礎とする関係の理論的な範疇としての明確化によって、初めて、商品・貨幣関係における対等・自由・平等の等価交換関係を基礎とした「市民的な関係」と、そして、資本・賃労働の階級関係のもとで価値増殖をおこなう資本制的生産との、それぞれの規定的性格と範疇的な区別が明確になり、そこから、「貨幣」と「資本」とのそれぞれについて論述する章ないしは篇の区別立てがおこなわれることになるのである。

それにたいして、新MEGA編集者は、『マルクス 資本論草稿集 ①』としての『1857-58年の経済学草稿』の「序文」において、「貨幣にかんする章」の最重要点として、「貨幣にかんする章のなかでのマルクスのもっとも重要な研究成果の一つは、生産手段の私的所有の諸条件のもとでの商品生産の発展した形態は、必然的に貨幣の資本への転化を前提するということの確認であった。商品生産と交換価値の発展傾向は「不可避免的に労働と所有の分離」をもたらし、「その結果、労働は他人の所有をつくりだすことに等しく、所有は他人の労働を支配することに等しくなる」³⁴⁾³⁵⁾ととらえたところにある、と述べている。

だが、「貨幣の資本への転化」を論じるためには、まず「貨幣」と「資本」との規定的性格の範疇的な相違が確定されることが必要である。そのためにこそ、「資本」の章の前に、「貨幣」の章が自立したかたちで立てられて、そこにおいて資本とは異なる商品・貨幣関係の規定的性格が範疇的に明らかにされることになっているのである。

『要綱』における「貨幣にかんする章」のもっとも基本的な重要な意義は、なによりもまず「貨幣」と「資本」との範疇的な区別によりそれぞれの規定的内容を明確にすることであり、そのようなものとしての「貨幣にかんする章」の自立化にもとづき、労働時間の対象化としての「交換価値」の等価交換に基礎づけられるところの商品・貨幣関係の規定的内容を確定するというところにある、とみるべきである。

「依存関係史」三段階説

そのような「交換価値」に規定された商品・貨幣関係において、生産における人身的依存関係の解消による自由・平等の「市民的」^{ビュルガーリヒ}関係が基礎づけられ、そして、「交換価値においては、人格と人格との社会的連関は物象と物象との一つの社会的関係行為に転化しており、人格的な力能は物象的な力能に転化している」³⁶⁾といったかたちで、自立した私的諸個人たちの物象的依存関係による疎外された社会関係がとらえられることになる。

ここに、いわゆる人類史における《依存関係史》三段階説が展開される。

「人格的な依存諸関係（最初はまったく自然生的）は最初の社会諸形態であり、この諸形態においては人間の生産性は狭小な範囲においてしか、また孤立した地点においてしか展開されないのである。物象的依存性のうえにきずかれた人格的独立性は第二の大きな形態であり、この形態において初めて、一般的社会的物質代謝、普遍的諸関連、全面的諸欲求、普遍的諸力能といったものの一つの体系が形成されるのである。諸個人の普遍的な発展のうえにきずかれた、また諸個人の共同体的、社会的生産性を諸個人の社会的力能として服属させることのうえにきずかれた自由な個性は、第三の段階である。第二段階は第三段階の諸条件をつくりだす。それゆえ家父長的な状態も、古代の状態（同じく封建的な状態）も、商業、奢侈、貨幣、交換価値の発展とともに衰退するが、同様にまた、これらのものと歩みを同じくして近代社会が成長してくるのである。」³⁷⁾

この《依存関係史》三段階説は、人格的あるいは物象的な社会的依存関係と個人的自立性との関連のあり方を視座とした人類史についてのとらえ方であるが、そのような人類史の把握の中軸にすえられている近代社会についての規定的内容は商品・貨幣関係に他ならないものであって、そこにおける「人格的依存関係の解消」と「物象的依存性」のもとでの「人格的独立性」

という近代社会の規定的性格の把握は、まさに商品・貨幣関係の全面化による私的所有のもとでの諸個人の自由と平等という規定性の把握によるものである。

そのように、この《依存関係史》三段階説は、商品・貨幣関係についての『要綱』「貨幣にかんする章」の内容を基軸としてとらえられた人類史の発展諸段階の把握に他ならないものである。

なお、マルクスは、さらに、「労働時間」にもとづく「交換価値」に規定された「貨幣」の把握に関連して、《時間の経済〔節約〕》をすべての経済の帰着点としてとらえようとしている。すなわち、「共同社会的生産が前提されているばあいでも、時間規定はもちろんあいかわらず本質的なものでありつづける。社会が小麦や家畜などを生産するために必要とする時間が少なければ少ないほど、社会はますます多くの時間をその他の生産、物質的または精神的な生産のために獲得する。個々の個人のばあいと同じく、社会の発展の、社会の享受の、そして社会の活動の全面性は、時間の節約にかかっている。時間の経済〔時間の節約〕、すべての経済〔節約〕は結局のところそこに帰着する」³⁸⁾。

だが、《時間の経済》論は、必要労働時間の短縮による剰余労働時間の増大にかかわる論点であるから、それは、理論的には、「貨幣」についての論議におけるものではなくて、労働時間による価値規定を論じる「価値」についての論議のなかか、あるいは、労働生産性向上にもとづく相対的剰余価値論にかんする「資本」についての論議のなかで展開されるべき論点に他ならないものである。

商品・貨幣関係にとっての資本 = 賃労働関係

これまでみてきたように、「貨幣にかんする章」における商品・貨幣関係について、マルクスは、基本的には、商品・貨幣流通における「交換価値」の等価交換を土台とした自由・平等の「市民的」関係を規定的内容としたも

のとしてとらえているのであるが、マルクスはそれだけにとどまらないで、さらに、「交換価値」にもとづく商品・貨幣関係と近代社会の生産的基礎における資本・賃労働関係との関連についても言及している。

それは、ひとつには、「貨幣」による生産と社会の発展にとっての賃労働の意義についての指摘であって、「貨幣が生産の発展した契機として存在しうるのは賃労働が存在しているところだけであるということ、したがってまた、そこでは貨幣は、社会形態を解体するどころか、むしろ社会形態を発展させるひとつの条件であり、物質的ならびに精神的な、あらゆる生産諸力の発展のための動輪であるということは、貨幣の単純な規定そのもののうちに含まれている」³⁹⁾としている。

さらに、もうひとつ、マルクスは、「貨幣」による「労働」の購入による資本＝賃労働関係への途についても、次のように示唆している。

「ブルジョア（市^{ビュルガーリヒ}民）社会の基本的前提は、労働が直接的に交換価値を生産すること、したがって貨幣を生産することであり、次には、貨幣もまた直接的に労働を購入すること、したがって、労働者自身がみずから、彼の労働を交換において譲渡するかぎりでのみ、貨幣はその労働者を購入する、ということである。したがって、第一の面からの賃労働と第二の面からの資本とは、発展した交換価値およびその受肉化としての貨幣の別の形態にほかならない。」⁴⁰⁾

そして、単純流通としての商品・貨幣関係における所有の内容と対比しながら、「貨幣」による「労働」の購入によってひきおこされる事態について、「資本」についての論議を先取りするかたちで示している。

すなわち、単純流通としての商品・貨幣関係においては、所有は「労働による労働生産物の領有」であって、自己労働による自己の労働生産物の領有か、あるいは、自己労働の生産物との等価交換による他人の労働生産物の領

有に他ならないものであるが、新たな事態として「労働と所有との分離」がひきおこされると、「その結果、労働は他人の所有をつくりだすことに等しく、所有は他人の労働を支配することに等しくなる」⁴¹⁾とするのである。

そして、その結果、「現存のブルジョア(市^{ビュルガーリヒ}民)社会の全体のなかでは、諸価格としてのこうした指定や諸価格の流通などは、表面的な過程として現われ、その深部においてはまったく別の諸過程が進行し、そこでは諸個人のこのような仮象的な平等と自由は消失する」⁴²⁾ことになるのであって、現存ブルジョア(市^{ビュルガーリヒ}民)社会における自由と平等の仮象性が明らかになってくる、と指摘する。

だが、このような「貨幣」による「労働」の購入にもとづく「貨幣の資本への転化」の内容的吟味と理論的展開は、次の「資本にかんする章」の課題である。

「貨幣にかんする章」の設定が『要綱』にもたらした課題

ともあれ、マルクスは、『要綱』において、これまでみてきたような「貨幣にかんする章」において明らかにされた「交換価値」にもとづくものとしての商品・貨幣関係についての理論的把握を跳躍台としながら、「貨幣」とは規定的内容を異にする「資本」関係についての理論的解明をおこなっているのである。

ここにおいて、「貨幣にかんする章」の設定により、『経済学批判要綱』は、「貨幣にかんする章」と「資本にかんする章」との二章構成による論述の展開がおこなわれることになる。このことは、経済学体系の理論的展開にとってきわめて重要な意味をもつものであって、『要綱』において次のような重要な課題が提起されることになる。

そのひとつは、あらためていうまでもないことであるが、商品・貨幣関係そのものの独自の規定的内容を自立的に解明することが必要になるということである。このことは「貨幣にかんする章」の課題として取り組まれて

いる。

その二としては、規定的内容を異にする商品・貨幣関係と資本=賃労働関係との関連をどうとらえるかという問題を明らかにしなければならないことになる。このことは、貨幣から資本への移行をどう論述するかという論点ともなるものであるが、それはさらに領有法則転回論の展開へとも繋がるものである。

その三として、「資本」の章においては、商品・貨幣関係における交換と流通の過程における事態とは別の規定的性格をもつ資本=賃労働関係のうえに打ち立てられた生産様式のもとの資本にとっての価値増殖を明らかにすることが必要となる。それは、商品・貨幣関係的な資本と労働との等価交換というあり方においてではなく、経済的諸活動にとっての規定的モメントたる生産の場においてとらえられるものとなる。

そこに、近代的生産における資本と賃労働のもつ意義が理論的に明確になり、剰余価値生産の秘密が明らかにされる。そして、そのうえに、資本の運動の諸姿態が解明されることになる。

4. 「交換価値にもとづく生産」概念の定置

交換価値と生産的基礎

ところで、マルクスは、『経済学批判要綱』において、近代社会の経済的諸関係についての理論的把握の深化のなかで、そこにおける経済的諸関係の規定的なあり方を、これまでのように「ブルジョア的（市民的）生産」「ブルジョア的（市民的）^{ビュルガーリヒ}生産様式」という表現用語でもって概括的にあらわすのではなくて、経済的諸関係の基礎的要因としての「生産」や「生産様式」を「貨幣」や「資本」といった経済的諸要因と直接的に関連する規定的要因でもって表現しようとする試みをおこなっている。

そのような『要綱』における近代社会の経済的諸関係についての基軸的概

念と用語法についての新たな試みは、やがては、その経済的内容を明確にしながら『資本論』段階における資本主義範疇としての「資本制的生産(様式)」という用語へと結実していくことになるものである。

そのようなものとして、「貨幣にかんする章」においては、商品・貨幣関係を基礎づける生産や生産様式の規定的事態が、基本的には商品・貨幣流通における「交換価値」に規定される用語として表現されている。

生産が交換価値に規定される事態について、マルクスは次のように指摘している。

「どんな生産者も彼の商品の交換価値に依存するほどにまで、生産が形成されていけばいくほど、すなわち生産物が現実交換価値となり、そして交換価値が生産の直接の目的となればなるほど、貨幣諸関係はますます発展し、貨幣関係に内在する諸矛盾、生産物の貨幣としての自己との関係に内在する諸矛盾は、ますます発展せざるをえない。交換の必要と生産物の純粋な交換価値への転化とは、分業と同じ度合いで、すなわち生産の社会的性格とともに進展する。……交換関係が、諸生産者にたいしては外的な、そして彼らには依存しない力として基礎を固める。」⁴³⁾

そのような「交換価値」に規定された「生産」が社会的諸関係にもたらす事態について、マルクスは、「交換価値と貨幣とによって媒介されるものとしての交換は、もちろん諸生産者相互間の全面的な依存性を前提するが、しかし同時に諸生産者の私的利害の完全な孤絶化および社会的労働の分割〔社会的分業〕をも前提する」⁴⁴⁾とし、階級的関係としてではなくて、「生産者の私的利益の完全な孤絶化」による自立的な私的諸個人たちの社会関係として把握しているのである。

そして、マルクスは、そのような商品・貨幣関係のもとの交換価値を目的とした生産について、「交換価値にもとづく生産」等々といったかたちで、

「交換価値」を規定的要因とした「生産」や「生産様式」という用語でもって表現している。

「……交換価値に立脚する一般的な生産 (der allgemeinen auf dem Tauschwerth beruhenden Production) の一契機は、生産物と生産作用因とを貨幣の規定のうちに置くことであって、この規定は生産物とは区別されたひとつの貨幣を想定しているからである。また、生産をその総体性において考察する場合には、貨幣関係それ自体がひとつの生産関係であるからである。」⁴⁵⁾

そして、そのような「交換価値」に規定された社会を「ブルジョア社会ビュルガーリヒ (市民社会)」と等置しながら、「ブルジョアビュルガーリヒ (市民) 社会、つまり交換価値に立脚した社会の内部で (innerhalb der bürgerlichen, auf dem Tauschwerth beruhenden Gesellschaft) つくりだされる生産諸関係ならびに交易諸関係こそは、同時にまた、それらの諸関係の数とちよほど同数の、ブルジョアビュルガーリヒ (市民) 社会を爆破するための爆弾ともなるのである」⁴⁶⁾と、「ブルジョアビュルガーリヒ (市民) 社会」における「生産諸関係ならびに交易諸関係」を把握しているのである。

そのような「交換価値」に規定された「生産」や「生産様式」についての用語は、『要綱』の全範囲にわたって、次のような用語表現でもって使われている。

- ① 「交換価値の基礎のうえでの生産 (die Production auf der Basis der Tauschwerthe)」 (MEGA, II-1.1, S.94)
- ② 「交換価値に立脚する一般的な生産 (die allgemeinen auf dem Tauschwerthe beruhenden Production)」 (Ibid., S.142)
- ③ 「交換価値を基礎としている、一般的な生産 (die allgemeinen, auf den Tauschwerth begründeten Production)」 (S.142)

- ④ 「交換価値に照応する社会の生産様式 (die ihm [die Tauschwerth] entsprechenden Productionsweise der Gesellschaft)」 (S.162)
- ⑤ 「ブルジョア的(市民的^{ビュルガーリヒ})生産, すなわち交換価値を指定する生産の体制 (das Systems der bürgerlichen, d.h. der Tauschwerth setzenden Production)」 (S.178)
- ⑥ 「交換価値を指定する生産 (die Tauschwerth setzende Production)」 (S.179)
- ⑦ 「交換価値と発展した流通とが前提されている近代的生産 (die moderne Production, worin der Tauschwerth und die entwickelte Circulation vorausgesetzt sind)」 (S.179)
- ⑧ 「交換価値のうえに打ちたてられた生産様式 (die auf den Tauschwerth gegründeten Productionsweise)」 (S.187)
- ⑨ 「交換価値にもとづく生産 (die auf dem Tauschwerthe basirte Production)」 (MEGA, II-1.1, S.411)
- ⑩ 「交換価値を生産する生産 (der Tauschwerthe producirenden Production)」 (Ibid., S.412)
- ⑪ 「交換価値にもとづく生産 (die auf den Tauschwerth basirte Production)」 (S.416)
- ⑫ 「交換価値にもとづく生産 (die auf den Tauschwerth gegründete Production)」 (S.428)
- ⑬ 「分業および交換にもとづく生産 (die auf Theilung der Arbeit und Austausch gegründeten Production)」 (S.507)
- ⑭ 「多かれ少なかれ交換にもとづく生産」 (der more or less auf ihr [der Austausch] geguründeten Production)」 (S.554)
- ⑮ 「価値に立脚する生産 (die auf dem Werth beruhenden Production)」 (S.580)
- ⑯ 「交換価値を土台とする生産 (die auf dem Tauschwerth ruhnde Production)」 (S.582)
- ⑰ 「交換価値に立脚する生産諸関係 (die auf dem Tauschwerth basirten Produc-

tionsverhältnisse)』(S.662)

- ⑱ 「交換価値にもとづく生産様式 (die auf den Tauschwerth basirte Produktionsweise)」(S.708)
- ⑲ 「多かれ少なかれ交換に立脚するすべての生産様式 (in allen auf dem Austausch mehr oder minder beruhenden Produktionsweise)」(S.716)

なお、ついでながら、近代社会の経済的諸関係の規定的内容を把握するものとして『要綱』以前に使われつづけてきた「ブルジョア的 (市民的) 生産 (様式) ^{ビュルガーリヒ} bürgerliche Productions(weise)」という用語は、『要綱』では11回しか使われていない。

ところで、「交換価値」に立脚する「生産」の体制について、マルクスは、「ブルジョア的 (市民的) 生産」^{ビュルガーリヒ} と等置しながら、次のように述べている。

「流通の前提とは、労働による諸商品の生産であるとともに、諸交換価値としての商品の生産でもある。これが流通の出発点であり、また流通はそれ自身の運動を通して、みずからの運動の結果としての諸交換価値をつくる生産にたちかえるのである。……/この運動は、異なる姿態をまとして現われる、すなわち価値を生産する労働へ歴史的につながるものとして現われるとともに、また他方ではブルジョア的 (市民的) 生産、すなわち交換価値を措定する生産の体制 (innerhalb des Systems der bürgerlichen, d. h. der Tauschwerth setzenden Production) そのものの内部においても現われる。」⁴⁷⁾

この「交換価値」にもとづく「生産」の規定的な内容は、基本的には「交換価値」を目的としておこなわれる生産ということである。それは、「使用価値のための労働という性格を失」って、「流通によって規定され、交換価値を措定する生産に転化」されたところの、なんらかのかたちでおこなわれる「交換価値」をめざした生産に他ならぬものである。

したがって、そのかぎりにおいては、その生産はけっして資本による利潤の獲得をめざす資本・賃労働関係にもとづく近代的な資本制的生産形態というものではない。

マルクスは、「交換価値にもとづく生産」について、たとえば社会の境界において余剰が交換される商品や、あるいは、囲い込み運動による羊の牧畜にもとづく商品としての羊毛販売について指摘したりしているが、さらに、近代的な資本＝賃労働関係のもとでの資本制的生産についても取りあげたりして、「余剰としてのみ交換価値をつくりだすにすぎない生産」から社会的生産物のほとんどが商品として生産される資本制的な生産形態まで含むさまざまなかたちで存在するものとしてとらえている。

それはいわば商品一般あるいは貨幣一般を問題にしているものであって、歴史的な小商品生産者を取りあげているものでもなければ、資本制的商品生産そのものを問題にしているものでもない。

その意味では、ここで論じられている「交換価値にもとづく生産」は、貨幣の資本への転化における「歴史説」や「論理・歴史説」における資本制的生産以前の歴史的な「小商品生産」範疇でもなければ、「資本制的商品生産」範疇でもない。それは、いわば「論理説」的な性格をもった範疇としての「商品生産」一般とみるべきものであって、現実的事態としては資本制的生産様式以前の時期におけるさまざまな諸形態の「商品」範疇も、資本制的「商品」も含むものである。

すなわち、「交換価値にもとづく生産」とは、そのような商品・貨幣関係におけるキー・カテゴリーとしての「交換価値」を基軸として規定的性格をとらえられた「生産」に他ならないものである。

だからして、「交換価値にもとづく生産」としては、それが資本・賃労働関係によっておこなわれている生産活動をとりあげて論じている場合においても、商品・貨幣関係における「交換価値」を基軸とした交換関係における事態として資本や賃労働を取りあげているのである。

すなわち、資本家と賃労働者とは取りむすぶ関係についても、労働力の商品としての売買という商品・貨幣関係と、そして、資本の支配のもとでの労働者の労働という資本制的生産活動とそれにたいして支払われる賃金との交換といった、二層の関係としてとらえながら、「生きた労働の対象化された労働との交換は、すなわち社会的労働を資本と賃労働との対立という形態で措定することは、価値関係と〔そして〕価値に立脚する生産 (der auf dem Werth beruhenden Production) との究極の発展である」⁴⁸⁾といったかたちで、その関連をとらえようとしているのである。

それゆえ、近代社会における経済構造の総体にとっては、そのような「交換価値にもとづく生産」の「表層」では等価物の自由で平等な交換がおこなわれているが、その「土台」においては「使用価値としての生きた労働」との交換となっている、という把握となっているのである。

「交換価値にもとづく生産 (die auf den Tauschwerth basirte Production) の表層では、かの、等価物の自由かつ平等な交換がおこなわれているが、この生産は土台においては、交換価値としての対象化された労働と使用価値としての生きた労働との交換であり、あるいは、それがどのように表現されるにせよ、労働が自分の客体的諸条件にたいして——だからまた自分自身によって創造された客体性にたいして——他人の所有物にたいする様態でかわること、すなわち労働の外在化である。」⁴⁹⁾

そのように、近代社会における経済的構造の総体において、「交換価値にもとづく生産」の「表層」をなすものは対等・自由・平等の等価交換の関係に他ならないものであるが、その生産の「土台」においては、「使用価値としての生きた労働」(すなわち、賃金労働者の労働活動)と「交換価値としての対象化された労働」(すなわち、賃金)との交換となっているものであるとして、資本と労働との交換関係における「表層」と「土台」との重層性についての

把握となっているのである。

〔注〕

- 1) MEGA, II-1.1, S.43. 資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス 資本論草稿集 1 1857-58年の経済学草稿』（以下、『1857-58年の経済学草稿』とする）第1分冊，大月書店，1981年，62ページ。
- 2) MEW-29, S.225. 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」（1857年12月8日）『マルクス＝エンゲルス全集』第29巻，181ページ。
- 3) MEW-29, S.232. 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」（1857年12月18日）『マル＝エン全集』第29巻，187ページ。
- 4) 「問題を論じる方法の点では，ほんの偶然のことから——フライリヒラートがもとバクナーエンの蔵書だったヘーゲルの本を数冊みつめて，僕にプレゼントとして送ってくれた——ヘーゲルの『論理学』をもう一度ばらばらめくってみたのが，大いに役に立った。もしいつかまたそんな仕事をする暇でもできたら，ヘーゲルが発見はしたが，同時に神秘化してしまったその方法における合理的なものを，印刷ボーゲン2枚か3枚で，ふつうの人間の頭にわかるようにしてやりたいものだが。」
「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」（1858年1月〔16日ごろ〕）
MEW-29, S.260. 『マル＝エン全集』第29巻，206ページ。
- 5) この時期に示されたマルクスの経済学批判体系プランの変遷は，次のもののみることができる。
 - ① MEGA, II-1.1, S.151-152. 邦訳『経済学批判要綱』『1857-58年の経済学草稿』第1分冊，252-253ページ。
 - ② *Ibid.*, S.187. 邦訳，310-311ページ。
 - ③ *Ibid.*, S.199. 邦訳，329-330ページ。
 - ④ MEW-29, S.551. 「マルクスからラサール（在リュッセルドルフ）へ」（1858年2月22日）『マル＝エン全集』第29巻，430ページ。
 - ⑤ *Ibid.*, S.554. 「マルクスからラサール（在ベルリン）へ」（1858年3月11日）同上，432ページ。
 - ⑥ *Ibid.*, S.314-318. 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」（1858年4月2日）同上，246-250ページ。
- 6) MEW-29, S.330. 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」（1858年5月31日）『マル＝エン全集』第29巻，257ページ。
- 7) その点について，旧 MEGA 編集者は次のように述べている。「7冊のノートの手稿を，マルクスは外形的に表題をあたえることによって整理してはいない。そのか

わり手稿の内容は大部分、『私自身のノートへの心覚え〔私自身のノートにかんする摘録〕』で詳しく示されている。『心覚え』〔摘録〕での要約を、われわれは手稿に欠如している表題のかわりにテキストのそれに対応する個所に挿入した。」(Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857-1858*, Dietz Verlag, Berlin 1953, S.XIV. 高木幸二郎監訳, 旧『経済学批判要綱』第1分冊「序言」16ページ。)

- 8) MEGA, II-1.1, Apparat, S.790. 邦訳『1857-58年の経済学草稿』第1分冊「成立と来歴」56* ページ。
- 9) *Ibid.*, Apparat, S.785. 邦訳, 51* ページ。
- 10) 邦訳では「ノートIIの番号」となっているが、ここでの原文“Ziffer II”は「ノートII」ではなくて「貨幣にかんする章」という見出しに付けられた数字の「II」であると思われる。
- 11) MEGA, II-1.1, Einleitung, S.*14-*15. 邦訳『1857-58年の経済学草稿』第1分冊「序文」20*-21* ページ。
- 12) *Ibid.*, Apparat, S.779. 邦訳, 45* ページ。
- 13) Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857-1858*, S.XI-XII. 旧『経済学批判要綱』第1分冊「序言」12-13 ページ。
- 14) 森田桐郎「第三章『貨幣にかんする章』分析——市民社会と歴史認識」山田鋭夫・森田桐郎編著『講座 マルクス経済学6 コメンタール《経済学批判要綱》上』日本評論社, 1974年, 111 ページ。
- 15) Fred E. Schrader, *Restauration und Revolution. Die Vorarbeiten zum «Kapital» von Karl Marx in seinen Studienheften 1850-1858*, Gerstenberg Verlag, Hildesheim 1980, S.111-112. 山本孝則「《紹介》フレット・シュラーダー著『再建と革命——1850~1858年のマルクスの研究ノートにおける〈資本論〉の準備作業——』(『武蔵大学論集』第31巻第6号, 1984年3月) 129ページ。ヴィゴツキー『資本論の生誕』〔1965年〕新読書社, 1967年, 70-86 ページ。
- 16) MEGA, II-1, S.57. 邦訳, 81 ページ。
- 17) *Ibid.*, 同上。
- 18) *Ibid.*, S.73. 邦訳, 107 ページ。
- 19) *Ibid.*, S.151-152. 邦訳, 252-253 ページ。
- 20) 1858年2月22日付けラサール宛ての手紙のなかで、マルクスは、「全体は六つの篇に分かれる。(1) 資本について (いくつかの序章をふくむ)。(2) 土地所有について。(3) 賃労働について。(4) 国家について。(5) 国際貿易。(6) 世界市場」(『マル=エン全集』第29巻, 430ページ)と書いており、そこでは、「交換価値、貨幣、価格」を扱う部分は「序章」と考えられている、とみることもできなくな

い。新MEGA編集部はそうに理解しているようである(邦訳『1857-58年の経済学草稿』第1分冊「成立と来歴」45ページ)。

- 21) 前掲書簡の20日ばかり後のラサール宛ての手紙(1858年3月11日)のなかでは、マルクスは、「第1分冊……それは次のものを含む」。(1) 価値、(2) 貨幣、(3) 資本一般(資本の生産過程、資本の流通過程、両者の統一または資本および利潤、利子)。これは独立した一冊となる(『マル=エン全集』第29巻、432ページ)と述べており、ここでは「価値」も「貨幣」も「資本」とならぶ篇(または章)とされる扱いとなっている。
- 22) MEW-28, S.434. 「マルクスからエンゲルス(在マンチェスターへ)」(1855年2月13日)『マル=エン全集』第28巻、348ページ。
- 23) MEGA, II-1.1, S.123-124. 邦訳、199-200ページ。
- 24) *Ibid.*, S.132. 邦訳、216ページ。
- 25) *Ibid.*, S.159-160. 邦訳、269-270ページ。
- 26) MEW-29, S.372. 「マルクスからエンゲルス(在マンチェスターへ)」(1858年11月29日)『マル=エン全集』第29巻、291ページ。
- 27) MEGA, II-1.1, S.72. 邦訳、105ページ。
- 28) *Ibid.*, S.75. 邦訳、112ページ。
- 29) *Ibid.*, S.119. 邦訳、188ページ。
- 30) *Ibid.*, S.80. 邦訳、120ページ。
- 31) *Ibid.*, S.165. 邦訳、276ページ。
- 32) *Ibid.*, S.169-170. 邦訳、283-284ページ。
- 33) *Ibid.*, S.168. 邦訳、280ページ。
- 34) *Ibid.*, S.160. 邦訳、271ページ。
- 35) MEGA, II-1.1, Einleitung, S.17*. 邦訳『1857-58年の経済学草稿』第1分冊「序文」23*ページ。
- 36) MEGA, II-1.1, S.90. 邦訳、137ページ。
- 37) *Ibid.*, S.90-91. 邦訳、138ページ。
- 38) *Ibid.*, S.103-104. 邦訳、162ページ。
- 39) *Ibid.*, S.148. 邦訳、245ページ。
- 40) *Ibid.*, S.149-150. 邦訳、249ページ。
- 41) *Ibid.*, S.160. 邦訳、271ページ。
- 42) *Ibid.*, S.171. 邦訳、285ページ。
- 43) *Ibid.*, S.80-81. 邦訳、120ページ。
- 44) *Ibid.*, S.90. 邦訳、138-139ページ。
- 45) *Ibid.*, S.142. 邦訳、233-234ページ。

- 46) *Ibid.*, S.92. 邦訳, 140 ページ。
- 47) *Ibid.*, S.177-178. 邦訳, 297 ページ。
- 48) *MEGA*, II-1.2, S.580-581. 邦訳『1857-58年の経済学草稿』第2分冊, 489 ページ。
- 49) *Ibid.*, S.416. 邦訳, 178-179 ページ。